

浅間高原夏季特別集会（1）（ひまわり壮）

絶対恩寵

――詩篇第103篇――

1957年8月9日

小池辰雄

序言 全霊全身の讚美 恩恵の回顧 マイナス99とプラス1 雲散霧消 恩寵の現実Ⅱ信仰の
現実 沈黙の叫び 天よ、地よ 福音を証しする義務 全贖全癒 根源現実 キリストの原始
核 キリストの永遠の翼 天則 聖言を行う勇士

【詩篇第103篇】

ダビデのうた

1 わが靈魂よ、エホバをほめまつれ、わが衷なるすべてのものよ、そのきよ
き名をほめまつれ。
2 わがたましいよエホバを讃めまつれ、そのすべての恩恵をわするるなかれ。
3 エホバはなんじがすべての不義をゆるし、汝のすべての疾をいやし、
4 なんじの生命をほろびより贖いだし仁慈と憐憫とを汝にかうぶらせ、
5 なんじの口を嘉物にてあかしめたもう。斯てなんじは壮きて驚のごとく新
になるなり。

6 エホバはすべて虐げらるる者のために公義と審判とをおこないたもう。

7 おのれの途をモーセにしらしめ、おのれの作為をイスラエルの子輩にしらしめ給えり。

8 エホバはあわれみと恩恵にみちて怒りたもうことおそく仁慈ゆたかにましませり。

9 恒にせむることをせず永遠にいかりを懷きたまわさるなり。

10 エホバはわれらの罪の量にしたがいて我等をあしらいたまわず。われらの不義のかきにしたがいて報いたまわざりき。

11 エホバをおそるるものにエホバの賜うそのあわれみは大いにして、天の地よりも高きがごとし。

12 そのわれらより愆をとおぎけたもうことは東の西より遠きがごとし。

13 エホバの己をおそるる者をあわれみたもうことは父がその子をあわれむが如し。

14 エホバは我等のつくられし状をしり、われらの塵なることを念い給えはな



り。

15 人のよわいは草のごとく、その栄えは野の花のごとし。

16 風すぐれば失せてあとなくその生^おい^いでし処にとえど尚しらざるなり。

17 然はあれどエホバの憐憫^{あわれみ}はとこしえより永遠まで、エホバをおそるるもの
にいたり、その公義^{ただしき}は子孫^{こくら}のまた子孫にいたらん。

18 その契約をまもりその訓諭^{みさとし}を心にとめて行^なうものぞその人なる。

19 エホバはその寶座^{みくら}をもろもろの天にかたく置^すえたまえり。その政權^{まつりごと}はよろ
ずのもののうえにあり。

20 エホバにつかうる使者^{つかい}よ、エホバの聖言^{みことば}のこえをきき、その聖言をおこな
う勇士^{ますらお}よエホバをほめまつれ。

21 その万軍よ、その聖旨^{みことろ}をおこなう僕等^{みこぞ}よ、エホバをほめまつれ。

22 その造りたまえる万^{よろずのもの}物^{もの}よ。エホバの政權^{まつりごと}の下なるすべての処にてエホバ
をほめよ、わがたましいよエホバを讃めまつれ。

●序言

どうぞ身体を楽にしてください。無理がないように。あぐらをかいても、よっかかっても、
寝てても、どうでもいいです。

夏この小諸でこのような特別集会をするのが恒例のようになりかけておりますが、けれ
ども、これは決して私たちは習慣になつてはならない。この一回限りです。この夏限りで
あるかもしれません。いや実に、そのつもりで私は皆さんとこの集会をしようと思ひます。

「この集会が終わつて、また先生は秋にも来るだろう」

なんてな気持ちでもって臨まれては困るのであります。秋からはもう来ない。どうか、そ
ういうわけでこの集会限り、お互いにこれに臨んで、正に一回限りの背水の陣であります。

そういうわけで、この集会に私も来たつもりです。ところが、もし皆さんの中にそうい
う気持ちでないのであるならば、是非今その気持ちを一回限りの気持ちに整えていただきたい。
私は、この聖書が分裂的な気持ちを非常に嫌つておりますので、それで全的にこれに立ち向
かう。そういった全的な気持ちで来ているかどうか。

私は集会のご案内を出しました。それでお返事をいただくことになつていた。けれども、
そのお返事をみますと、その期限までに出せない人もある。また事情があつて出せない方
もあります。まあいろいろな有形無形の答案がある。見てみると、その人の魂がどのよう
な気合でこれに向かつているかということが、もうそこで見えてくるわけです。まあ出だ
しがわるくてもしょうがないですから、どうか、さき程の荒井君も今の大塩君もすばらし
い出だしをしてくださったので、皆さん、この出だしに既にもうのかつていらつしやると
いうことで、私は安心しておりますが、もしまだモサモサしているならば、それはやはり



大塩君や荒井君のようになっていただきたいと思います。

私は、語るも聞くも同じことでありまして、皆さんにお説教は絶対にしない。皆さんと一緒にこの聖書の中に入るといっただけです。この気持は、決していわゆる謙遜でも何でもありません。そのために私は戦っているんですよ、今の教会やあるいは無教会のいろいろな方面と。私自身は、何と言われても抗弁しません。私はダメな男ですから。けれども、このダメな男が何を志して向かっているかということだけは、これは認めていただかなければならないと思う。

これから私は何年生きてても、相変わらずダメの男でありまして、皆さんはこんなダメな男と一緒に歩いていて大損をされるかもしれませんが、もし損だと思ったら、いつでも遠慮なく出て行っていただいて結構なんです。

問題は私たちは、預言者たちや使徒たちが本当にエホバに従いキリストに従った、その実存と同質的な歩き方をしたい。共々にそれを行きたい。天のシオンに向かってこの道を突っ走って行きたい。くたびれたならば、その友達をかついで歩いて行きたい。とこういうわけです。

皆さん、ここで疲れている方は、途中から寝たつていいですよ。私はかついであげます。けれども、魂は眠らないでくださいよ、魂は。魂はいい気持になって、この私の肩に乗っかっていただきたいと思います。それは私が背負うのではない。私の後に本当に背負ってくださいの方がいらつしやるから。そういうわけで、皆さんと行こうと。だから、大丈夫なんです。

どうか、力ま^{りき}ないでくださいよ。力まないで、あるがままに。私がいま「整えて」と言ったときも、「整える」という言葉を誤解しないでください。「整える」というと、

「まだ私は整っていない」

なんて言ったって、これはいつまで経っても整わないかもしれない。私だつてどのくらい整っているかわからない。ですから、整わなくていいですから、整わないまんまでさらけだすのが、整いというものです。

そういうようにして、楽な気持でこれにぶつかつていく。そうしたら、これは自動車ではない。これはすばらしい翼です。そこらの飛行機よりもっとすばらしい翼ですから、皆さん、大丈夫です。それでどうか、この集会を本当にその翼に乗りきつて、そして

「ああ、すばらしい！ こんな翼があつたか」

ということですよ。その翼をひとつ知つていただきたいと思います。

明日から、コリント前書13章を中心にして皆さんと学びたいと思う。4回にわたつて。

〔註… この4回の講筈は贖愛新書第1号『福音の心臓』（1964年刊）の中に収録〕

今日はその先ぶれに詩篇第103篇をえらんだ。これは詩篇の中でも最も著しいものの一つであると私は思います。あるいは、この中にもう全聖書の福音の本質が要約されている、



コンデンスされている、エッセンスの如き詩篇であるといってもいいと思う。これを展開に展開し始めたら、今晚徹夜しても間に合わないだろうと思います。しかし、今日はもちろん秩序を守りまして、10時頃おわります。

しかしながら、秩序を守るのは、先ほどのお話のように、固くなるのではない。このコップの水は円筒形になって秩序をまもっている。けれども、中は極めて自由です。この中に入っているが極めて自由。もしもう少しこの中に注げば、これはあふれる。そのように、その形の中にありながら自由に溢れていくような、そういった本質をもっている在り方、これが本当の在り方なんです。そうすると、もしその形がまちがっていたならば、それはそこを乗り越えて破っていきます。けれども、この相対的なものの中にいながら、或る絶対的な質を有っているということが大事なんです。

「私は御霊によつて歩いているから、あんな集会には適当に出たり入ったりしよう」

なんてのは、私はお断りしたい。そういったような態度は困る。キリストの、神の世界は驚くべき世界です。ですから、すばらしい神の秩序が本当の自由なんです。どうか、その意味におきまして、私たちはこの集会を皆さんとそのコップを本当にのみこんで、そして、いかなる現実に対しても真にそこに従いながら、しかもそれを満たしていくような存在となつていくというわけです。皆さん一人ひとりがこの集会を満たしてください。

●全霊全身の讃美

1 わが^{たましい}靈魂よ、エホバをほめまつれ、わが^{うち}衷なるすべてのものよ、そのきよき名^{みな}をほめまつれ。

2 わがたましいよエホバを^ほ讃めまつれ、そのすべての恩恵^{めぐみ}をわするるなかれ。

詩篇103篇は、皆さん、暗記なさつてもいいですよ。私は暗記がまずくて困るけれども、あなた方におすすめる資格はないけれども、どうか暗記するくらいによく読んでください。まず第一に何に呼びかけたかというと、

「わがたましいよ」

といつて呼びかけている。ずいぶん不思議な世界ですね、この^{たましい}靈魂の世界は。自分というものが顧みることのできない何ものかです。それは自分に向かって「わがたましいよ」と。面白いですね。

「わが^{たましい}靈魂よ、エホバをほめまつれ、わが^{うち}衷なるすべてのものよ、そのきよき名^{みな}をほめまつれ」

「エホバ」というのはこの頃の聖書〔新口語訳〕では「主」と訳してあります。「主」でもいいんですけれども、私はいつもこれを「実存主」という。実存の主、真に存在しているところのもの。在るというならば、神のみが真に在る。「わがたましいよ」といって一番自分の内的なものに向かって呼びかけて、その一番内的なものに向かって何を呼びうながし



たかというところ、これは非常に超絶したところの実存の神、真実存の神。これをほめまつる。

「わが^{たましい}靈魂よ、エホバをほめまつれ」

もうこれだけでいいです。何がなんでもエホバを讃めまつれという。何がなんでもエホバを讃めまつる。行き詰まっても何でもいい。エホバを讃めまつる。讃美です。人生の最後は讃美です。「詩篇」というのは「祈りの書」、あるいは「讃美の書」と称される。

「わが^{うち}衷なるすべてのものよ、そのきよき名をほめまつれ」

そこで、またおもしろい。「わがたましいよ」といって、しかも今度は

「わが^{うち}なるすべてのものよ」

と言っている、この言い方。「わが魂よ」はわれの中心です。どんな唯物主義者であろうと、

「おまえさんは魂がないか？」

と訊^きいたら、

「私は魂がない。私は物で出来ています」

と誰か言いますかね、唯物論者が。可哀相ですね、もしそんなことを言うとしたらば。どんな人であつても――それなら神さまを認めなくなつていいですよ、認めなくては――

けれども、自分の魂という世界は実はごまかしがきかない。

この魂に向かって人は、全宇宙最高の存在、神をまず讃える。そして今度は、「わが魂よ」と言つたあとで、「わが^{うち}なるすべてのものよ」と言い換えました。これは心臓も腎臓もいわゆる五臓六腑全部ひつくるめて、「わが^{うち}なるすべてのもの」(「コル・ケラーハイ、ケレブ(うちなるもの)」というのはそういった五臓六腑というようなヘブライ語なんです。この五臓六腑、全人、全存在、全人間、この我というものの一切がという、その全我。中心が魂であつて、そしてそのまた全我。これはこの聖書の世界が分裂していない。なるほど、「^{たましい}靈魂と心と身体」というようなことはいいです。^{たましい}靈魂(プニューマ)と心(プシュヘー)と^{からだ}身体(ソーマ)。パウロも言いました。霊と心と体。まだギリシア語には他の字もありますが。それは^{こんぜん}渾然として分かつことのできないものである。

ちつともむずかしい。皆さんがそうです。先ほど、コリント前書12章をお読みになつた通りです。これは有機体、オルガーニツシエス・ガンツ(有機体的全一)というやつで、有機的な全体という。有機的な全体だから離すわけにいかん。私がもしこつちの手を切つて、そしてここに置いてからこいつを付けようとしたつてダメです。つかない。これは離すことができない。皆さんはなるほど手がある足があるというけれども、手も足も頭もこれは全部渾然一体で、血がかけめぐっている、流動しているところの生命体、有機体です。これが、「わが魂よ」と言い、

「わが^{うち}なるすべてのものよ」

と言つて全存在に向かつて、

「きよき^{みな}名を讃めまつれ」



と。「きよきみ名を讃めまつる」のは、自分が頭脳^{あたま}で讃めたってダメだ。

「神さまはただひとりいる」

という結論にきて、アタマが神さまを讃めたってダメです。また、ただ心が讃めてもダメです。その中心の魂に向かつて言うことは、即ち全存在に向かつていることなんです。即ち、全身をもってエホバを讃美する。わが身も心も体も魂も一切をあげて。

「なんじ心をつくし、精神をつくし、思いをつくし、能力^{ちから}をつくして、主たる

汝の神を愛すべし」

と、キリストが言われた、その愛し方もまたそのような全生命を投じての愛である。この讃美もまた全生命を投じての讃美です。それでなければ、力が来ない。神の生命は来ない。生命は分裂したものではありません。どうして今のキリスト教の世界に何かズレが来たらんだろうか。何故かゴタゴタしているんだろうか。ということは要するにこのような、

「わが魂よ、わがうちなるすべてのものよ」

と言って投じていないからなんです。事柄がアタマのことであつたり、ただいわゆる「霊、霊」と言ってみたり、というように分裂している。

●恩恵の回顧

2 わがたましいよエホバを讃^{ほめ}まつれ、そのすべての恩恵^{めぐみ}をわするるなかれ。

とても私たちは、すべての恩恵をおぼえてはいませんよ。

「すべての恩恵^{めぐみ}をわするるなかれ」

といったって、これは困る。けれども、その気合は——私なんか一番記憶力がないダメな男で困るけれども。すぐ忘れてしまう。人の名前を忘れて大変失礼したり——

「そのすべての恩恵をわするるなかれ」

と。とにかく神さまのすべての恵みを忘れざらんとするその気合は必要です、私みたいな男は。皆さんの中には記憶力のいい人はみんなこれは忘れないかもしれませんが。

「すべての恵み」は、これは過去のことです。よく、

「過去はどうでもいいや」

というわけで過去を非常におろそかにする風向きの考え方がありますが、私はそれはまちがいだと思う。

「昔いまし、アブラハム・イサク・ヤコブの神」

という。もちろんアブラハム・イサク・ヤコブは現在でもあります。けれども、イスラエルの神は、歴史に顕れたところのエホバの神は歴史に現れてきた。「歴史」という字は、ヘブライ語にはこの「歴史」という語はないけれども、歴史という語がないくらい彼らは歴史の中に生きていたところの民族です。歴史を観念しないで歴史を実存していたところの民族。ギリシアには有名な歴史家もでした。けれども、ギリシアには歴史についての思



索はあっても、しかし、本当の歴史はもたない。本当の歴史を地でもって行つたところの民族はイスラエルの民族なんです。神さまは歴史を通して人類を創造し、かつこれを救い、また完成にもたらず。正にこれは一大経緯けいりんであります。

藤井先生の『羔の婚姻』というのが最近出ましたが、先生はどれほどこの神の歴史を重んじたか。そして聖書史観、聖書の歴史観に基づいて、偉大なあの『羔の婚姻』という詩をうたわれた。ついだから言いますけれども、皆さんはあの本をもしお持ちでなかったら、是非これは何とかして――お金がもしなかったらだんだん貯めて、これは真珠の如きものですから――買って、よく読んでいただきたいと思う。世界に類例のない詩ですから。日本人が知らない。クリスチャンが知らない。それはなるほど詩として、文学としてどれだけの優れた価値があるかは別問題です。私は文学としても相当評価していいと思いますけれども。あの素人の先生が已むにやまれずして、いわゆる詩人でなくして、しかしながら真の本質的な詩人として立たしめられて、あれを書かしめられた。私はあそこしおりの葉の中にも書いた。

「この世の不合理的に対して自分はあるひとつの最も美わしきものをもって復讐をする」

という。凄い言葉です。なぜかというと、

「この羔の婚姻の偉大な神さまの摂理と恩寵と希望をうたつて、これを世に投じて、不合理を真の合理で返す。仇を真の恩で返し、憎しみを真の愛で返そう」

というのが藤井先生の復讐の意味だと私は思いますけれども。そういうわけで、残念ながら、先生は途中で仆れたが、けれども、この詩はなお余韻をもつて響いている。

●マイナス99とプラス1

それで、過去・現在・未来という、その過去の恩寵を、すべての恩恵を忘るるなかれと。私は小学校の頃を思い出します、小学校の先生が私に教えていただいたことを。私たちは小学校の先生に教えていただいた、何ともいえない思い出というものはかえることのできないものを残している――この頃の小学生はどうですか知りませんが――それもやはり神さまの恵みのひとつなんです。先生方にご恩返しも何もできないで、先生方はもう大方は向こう側に逝ってしまったわられたようでありますけれども、たくさん私たちの私たちは恩を受けている。近頃はとかくすると、感謝という念が非常に薄らいできたのではないか。

「ああ、教師は教えるのが当たり前さ」

なんていうわけですよ。「先生」なんてあまりいわない。「教師」とか「講師」とかいう。私はなるほど職業は先生だけれども、なにも「先生」といわれたくはない。けれども、そういったような、高をくくったような、また当然のような気持が瀾漫びまんしてきている。仕方がないので、とうとうそういういったようなことがだんだん響いてきたものですから、「修身科」



というのを置こうか置くまいかと今、問題を文部大臣が起こしているわけです。反対もあるようですけれども。

けれども、このまではとにかく、日本は本当に日本人はおかしなことになるはしないかと私は思う。ヤスパース(カール・ヤスパース、1883〜1969 実存主義の思想家)というドイツの非常な世界一の哲学者がいますけれども、

「結局すべての文化の問題は最後はこの信仰にこなければダメだ」

ということはこの本の中でも言っている。いかにグラウベン(信仰)が大切であるかと。我々はその本当の深い根源に戻らなくてはいいかん。

「いろいろな歴史的な形成がされてきたけれども、しかしながら今、世界の状態を見てみると、どうもそれが非常なズレをきたして、ウルクヴェレ(源泉)に戻らなければならぬ」

ということを叫んでいるところがある。

すべての問題が実は日本において行き詰まりをきたしている。何といってもアメリカとかドイツとかいうのは、とにかく立ち返るべきところを知っている。ところが、日本は立ち返るべきところをもたない。それならば新しく――せつかく日本はすばらしい過去をもっている――日本の歴史を私たちは本当に学びなおさなくてはいいかん。日本のすばらしい先輩たちがいた。その日本の旧約時代というものを――藤井先生も書いていらつしやいますけれども――学びなおして、そして日本人の特殊性、神さまにどのような歴史を賜っていたのか。その民族として、またその一人びとりの個人として。大きな意味でそれは神の恵みの跡なんです。その神の恩恵の跡を本当に大きな神の光に照らして見るかどうか。

「そこにキリスト教があつたかないか」

と、そんなことを見ているのではない。神さまの世界はもつと大きな光をもつて、

「直きものにも直からざるものに雨を降らせ陽を照らす」

というのですから、万民族に向かつて、万民に向かつて、神の恵みは世界の開闢かいびやくから、創造から来ている。ただイスラエルの民は特に選ばれて、この神の恵みの道をはつきりと示すように選ばれただけのなしです。「他は神さまに顧みられていなかったか」と。そうではない。そういう意味で私たちの生涯は、

「私の生涯なんかくだらしないものです」

ではないですよ、皆さん。この日本の歴史のある一端を一人びとりが担っている。そして、自分たちのその過去というの――今現在ここに在るところに至つたところの皆さんは偶然ただひよつこりここへ来たのではない。今まで何十年かという過去がここに来さしめている――これは神さまの摂理せつりがはたらいている。そこには惨憺さんたんたるいろんな歩き方があつたかもしれない。けれども、それはすべて深い意味に於て神の恵みの、導きの、摂理のしからしめているところです。そして、私たちが本当に今、日本が問題中の問題としなければ



ばならないことに気がつかしめられているわけなんです。そうしたらば、この私たちの存在というものは、真に過去を自覚することによって、自分が現在あることがどのような神さまの導きのもとにあるか、ということにおいて過去を知る。

その中に個人的な自分のマイナスがどれほどあろうとも。私なんか「マイナス99」位な男でしょう。けれどもそこにしかし、神さまが「プラス1」を置いてくださったんです、「プラス1」を。そしてこの「マイナス99」をここまで運んでくださる。この「プラス1」というのが推進せしめていく。このマイナスをぐんぐん消して行ってください。これがこの「すべての恩恵を忘るるなかれ」ということです。

●雲散霧消

イザヤ書の44章21節から、

「21ヤコブよ、イスラエルよ、此等のことを心にとめよ。汝はわが僕なり。我なんじを造れり。なんじわが僕なり。イスラエルよ我はなんじを忘れじ。
22我なんじの愆を雲のごとくに消し、なんじの罪を霧のごとくにちらせり。
なんじ我にかえれ我なんじを贖いたればなり。」

私は聖書の中で一番すきな句のひとつであります。

23天よ、うたうたえエホバこのことを成したまえり。下なる地よばわれ。
もろもろの山よ林およびその中のもろもろの木よ、こえを発ちてうたうべし。
エホバはヤコブを贖えり。イスラエルのうちに栄光をあらわし給わん。」(イザヤ44・21・23)

なんてすばらしいでしょうね。詩ですよ、これはみんな。おのずからこれが詩になつてしまふ。自分たちは神さまの僕で、そして創られて、ここまで導かれて、しかも、

「イスラエルよ、われ汝を忘れじ」

と。私たちは神さまを忘れるかもしれない。大いに忘れます。けれども、「われ汝を忘れじ」という。友人は私たちをお互いに忘れるかもしれない。けれども、「われ汝を忘れじ」と。神さまは覚えていてというのは、サタンがおぼえているのとはちがう。サタンは人の悪いところばかりおぼえている。ところが、神さまは私たちを本当に子として、創られたものとして忘れない。

「汝を創った。しかも私はおまえの愆を霧の如く、雲散霧消させた」

と書いてある。雲散霧消。雲の如くに散らし、霧の如くに消す。雲消霧散でも雲散霧消でもいいですが。イスラエルの罪をすっかり霧と消してしまふ。山に登つて――浅間山にいつか登ったことがある――雲霧に囲まれて、しかしそれがスーッと晴れると、なんとすがすがしい眺望がそこに展開してくるか。そして、



「なんじ我にかえれ、我なんじを贖ひたればなり」

「我に帰れ、汝を贖いたり」

と。「我に帰れ、しからば我なんじを贖わん」ではない。

「私に帰りなさい。もう贖つてあるよ。私はおまえをすっかり、おまえの罪愆を消してしまった。今までがどうであつたかうであつたという、過去のマイナスは氣にしなくてよろしい。過去の恩寵をおぼえよ。すべての恵みをおぼえなさい。」

と。自分のつみとがはすべて消されました。神さまは私たちを贖つてくださった。贖つてくださった。贖われてあるんですよ、皆さん、贖われてある。いうまでもなく、私たちは十字架において贖われてある。十字架によつて、キリストの十字架によつて、私たちの罪は雲散霧消されてある。

「まだダメです」

ではない。ダメでいいです。

「ダメでいいから、いつまでもダメだから、もうダメでなくしてやつた」

と。これが十字架の贖罪^{あがない}、キリストの十字架の恩寵^{おんちよう}です。

●恩寵の現実Ⅱ信仰の現実

私は今、詩篇103篇またイザヤ書の句を、ただ聖書を研究しているのではない。皆さん、いろいろなものがモヤモヤしていますか。キリストの十字架は、その私たちのいろいろなモヤモヤを雲散霧消させるのに力がないですか。キリストの十字架を、

「ああ、すっかりもう私の準備は、実は十字架でできていた。私の整いは、実はキリストの十字架でできていた」

と、これを受けとってください。十字架を仰いで、本当に自分はすっかりあそこで――今の自分がどうであつても、将来の自分がどうなろうとも、そんなことに支配されずに――絶対にこの私の存在を贖いとした。

「われ汝を贖えり」

と神が言うときには、それは事実をもつて実力をもつて裏付けられた神の実言でありますから、これに一滴も水を割ることができない。これが絶対恩寵、これが全的恩寵です。恩寵もまた全的である。

「わがたましいよ、わが全我よ、神を讃めたたえよ」

というけれども、なぜ全我をもつて神を讃めたたえるんですか。キリストは十字架をもつて私たちを完全に贖いとってくださいているわけですから、神さまは完全に私たちを全的にこれを贖いとつてしまう。

「おまえのこの罪はまあちよつとまだ待つてくれ。こっちの方の罪だけは贖つた」

なんていうのではない。私たちの私という罪はこれですっかり贖いとられた。これはすつ



かり贖いとられているんですから、もう贖いとられている全我なんですから、何が残っているようにも、私たちの根底はすっかり神に贖いとられている。

これは信仰の現実ですよ。いいですか。信仰の現実です。単なる相対的な現実とは相違わらずダメです。けれども、神さまの恩寵の現実——恩寵の現実、信仰の現実、これは同じこと——これははつきりと私たちは贖いとられている。これを本当に受けとれば、直ちに本当に神を全存在をもつて、「ああ、主よ、なんじは」といつて讃美することができる。

●沈黙の叫び

本当に、

「ああ、主よ。ああ、エホバよ」

と全存在をもつて叫ぶということは——詩篇にはよく「叫ぶ」と書いてある——たとえば詩篇40篇をみますと、

「我たえしのびてエホバを^{まらのぞ}俟望みたり。エホバは我にむかいてわが^{さけび}号呼をききたまえり。」（詩篇40・1）

私は「沈黙の叫び」ということを言います。今のクリスチャンは本当に神さまに叫んでいるか。何も大きな声を出して祈らなくなっている。静かに祈っている。しかしながら、その静かさの中に本当の叫びがこもっているか、体裁であるか。そこなんです、問題は。私たちは、他の人がいるところであまり大きな声で祈らない方がいいですよ。

「せつかくあのお話はいいいけれども、祈りにきたら嫌になった」

なんていつて出て行く人がある。それで来ない人がたくさんいますから、そういうことは躓かせない方がいいでしょうから。

「よろしきに從つて」

とパウロが言っているとおりの、静かに祈つてあげたらいい。それは自由自在です。せせらぎ荘でも、またさけび荘でもどれでもいい〔註…この特別集会はひまわり荘やさきやき荘で開催され、小諸療養所からの参加者も多くあった〕。それは自由自在になる、たましいの世界は。本当に任せていれば。

とにかく、その質は全身が即ち、空中に飛躍するがごとき讃美であります。これがこの、

「わが^{さけび}号呼をききたまえり」

エホバに向かって待ちに待つて祈っていたが、ついに叫びをききたまえりと。

「病気がなかなか一進一退でうまくいきません」

という。いいです。けれども、問題は

「この病気がどうか」

じゃない。問題は、病気がどうかではない。

「わが全存在よ、わがうちなる五臓六腑よ、エホバに向かって叫ぼう。エホバに向



かつて讚美しよう。なんとあれば、エホバは、神さまは、キリストは私を贖ってくださっているからである」

ということ。

「我なんじを贖えり」

という。

●天よ、地よ

だから、そうしたら、このイザヤ書の作者は、第二イザヤは何と言ったですか。「我なんじを贖えり」と、これを聞いたならば、

「天よ、地よ」

と言って、天地に向かって讚美せよと言って、天地に向かって呼びかけている。自分ばかりでない。霧よ、流れよ、草よ、木よ、星よ、というわけで、詩篇148篇にも書いてあります。いかにすばらしくヘブライの人たちはその天地乾坤けんこんと一体になっているか。彼らの存在が、乾坤と一体になっている。イザヤ書の開卷第一にそう書いてある。

「天よ耳を傾けよ、地よわが言に耳を傾けよ」

とか。普通の今の人がそんなことを書いたら、これは氣狂きらがかと思う。ところが、聖書に書いてあるものだから、みんな平気で読んでいますけれども。平気で読んだらダメですよ。

「ははあ、そうか。私も本当に『天よ、地よ』と言って、天地に向かって本当に呼

びかけるだけの魂になっているか」

ということを自らに本当に怪しみ問うてみなくては。聖書の現実とは、今の普通のキリスト教会で考えているような、いい加減な現実ではない。私なんか、なかなかこれをつかめなくて困っているんです、正直。けれども、なにか少しずつ響きだしたから、私はうれしい。そして限りなく、その聖書の驚くべき現実には、聖書が叫び、聖書が呻き、聖書が大讃歌をあげているところの世界に入りたい。

ベートーヴェンとか、バッハとか、ヘンデルとかに、近代人はみな驚嘆するけれども、聖書にはそれ以上の凄い響きが発しているのに気がつかない。そうですよ。しかも、そのベートーヴェンとか、バッハとか、ヘンデルとか、彼らはみな聖書から学んでいるんですよ。そのウルシュプルングに、その根源に來ないで、ただベートーヴェンの、バッハの、シューベルトの、モーツァルトのなんて言ったってそれはダメですよ。日本人はいつたい何に驚くべきかといえば、それらを通してたずねてみれば実はみんなその源泉は聖書から來ている。源泉は聖書から來ている。だから、文学の方の方々でも、少しこの頃気がついた方は、

「ああ、やっぱり小池さんのいうように聖書を読んでおけばよかった」

と言う。何かというと私に聞きに來ますよ。そういう人たちがとにかく少し気がついて読み始めたから、私はうれしい。



●福音を証しする義務

皆さんは、そこらに学者があつたつて何があつたつて、皆さんはこの聖書を本当に身読また身読、^{からだ}身をもつて読みまた読んでいけば、何もこわいものはない。そしてまた、この中に一切のものが含まれている。そうしたら今度は、何にぶつかつてみても、それがみんな融けてくる。そういう驚くべき宝庫です、聖書は。どうか、聖書をもつと愛しましう。もつと愛読しましう。それは一句一句を本当にその中に投身していく。これも目で読んでいたらダメです。アタマで読んでもダメなんです、全身で読んでいかななくては。この中に入つていかななくては。

「そのすべての恩恵^{めぐみ}をわするなかれ。」

というのは、本当に今日在らしめて在り給うところのいろいろなものを通して。幼稚園から小学校からずうつと私たちは育つてきた。自分一人で大きくなつたような顔したらんでもない間違いです。ビスマルクは言つた。

「私は感謝する二つのものがある。私が今日あるのは、それは小学校の先生と聖書である」

と言つた。さすがにビスマルクです。日本に偉大な政治家が出ないというのは、グラッドストーンとかビスマルクのような偉大な政治家が出ないのは、この驚くべき聖書にぶつかつていないからです。

どうかそういうわけで、何よりも大事なものに私たちはぶつかり、また何よりも大切な日本の行き詰まりの鍵に今私たちはぶつかつているのですから、皆さんの責任と使命はまさに重大である。そして、どうか隣の人に、隣人に、でつくわすどういう人にでも、折りを見て――本当になにか本当のものを求めている人があつたらば、また苦しんでいる人があつたならば――この福音を証しする義務がある。絶対に義務がある。

「福音を証^{あかし}しなかつたならば、天国に行けない。福音を私していたら」

と、私は言つてもいいかとも思う。クリスチャンがもし福音を私していたら天国に行けませんぞ。ただギリシア語やヘブライ語を勉強して、集会にノホホンと出て――ノホホンでもないかもしれないけれども――そしてお終いなんていうクリスチャンは。

「あのクリスチャンは何々先生の集会に何年出かけていて立派なクリスチャンだ」

なんて、ダメですよ。本当に証して、本当にその身をもつて隣人に伝えていなければ。福音の世界でサマリヤ人にならなければ。

●全贖全癒

3 エホバはなんじがすべての不義をゆるし、汝のすべての疾^{やまい}をいやし、これは不思議な珍しい、また決定的な言葉です。

「エホバはなんじがすべての不義をゆるし、汝のすべての疾^{やまい}をいやし」



とは、なんとという大胆な言葉か。神の世界でなければ言えない。

「まだ私の病は癒えていません。まだ私の罪は消えていません」

とクリスチャンは言うでしょう。

「私は相変わらずダメな男です。なるほど不義や罪や間違いやいろいろです。だから、すべての罪は赦されていない」

と言うか。また、

「時々からだがおかしくなるので、病が癒されていない」

と言うか。そういうように考えていたら、これは百年生きても二百年生きてもダメなんです。皆さんの中に身体の欠陥がある方が幾人もある。けれども、病なんていうものは相対的なもんです。私だって欠陥があります。どんなに病が永く長引きましようとも、消長がありましようとも、詩篇103篇のこの3節を本当に現に今、自分のたましいの奥底で受けとるか受けとらないかが最も重大な問題なんです。

「わがすべての不義は赦されてある。わがすべての病は癒されてある。根源的に癒されてある」

と。これは新約聖書の、特にヨハネ伝あたりに来て、キリストにぶつかつたらば、はつきりわかる。

「おまえたちは死んでも死なない。私は何を与えに来たか。永遠の生命を与えに来た。」

と。永遠の生命は本当に罪からの解放と、病からの全的解放があるところにのみ、永遠の生命がある。それでキリストは、

「死んでも死なない」

と言われたんです。死んでも死なないと言われた。現象的に私たちの肉体は滅びていつても、絶対にそれで死なない。

それは根源的にどこから来るか、この私たちの不義が赦されている、不義がすつとばされているのは、さっきの詩篇40篇のところを開いてごらん下さい。

「9 われ大いなる会つどいにて義をつげしめせり。視くちびるよわれ口唇をとじず、エホバよなんじ之をしりたもう。10 われなんじの義をわが心のうちにひめおかず、なんじの眞実まこととなんじの拯救すくいとをのべつたえたり。我なんじの仁慈いつくしみとなんじの眞理まこととおおいなる会つどいにかくさざりき。11 エホバよなんじ憐憫あわれみをわれに惜しみたもうなかれ。仁慈と眞理とをもて恒つねにわれをまもりたまえ。」(詩篇40・9)

〜 11

詩篇40篇は11節でいっぺん切れる。12節以下は詩篇70篇と全然同じです。どうしてここに入ってきたかというのは別な問題ですが。今、9節から読みましたところに「なんじの義」「なんじの眞実」「なんじの救い」「なんじの仁慈」「なんじの眞理」と畳みかけて言つてある。



そしてもう一つ大事なことは8節に、

「⁸わが神よわれは聖意^{みこころ}にしたがうことを楽しむ。なんじの法はわが心のうちにある」と

この詩篇40篇の8節というのがまた実に大事な節であります。その前の7節に、

「⁷そのとき我いえらく観^{きた}われ来らんわがことを書^{ふみ}の巻にしるしたり。

というその書きしるす内容が即ち8節なんです。

⁸わが神よわれは聖意にしたがうことを楽しむ。なんじの法はわが心のうちにある」(詩篇40・7、8)

と自分が書きとめたという。神の聖意に従うことを楽しむ。神の聖意に従うことを全的に楽しみ得たのはナザレのキリストだけです。

「なんじの法はわが心のうちにあり」

という。その神の律法を心のうちに置くというのは、エレミヤが31章で預言しているような言い方なので、このエホバの律法、モーゼの法が心のうちに、腸^{はらわた}のうちにあって、本当に神の法則が自分の心のうちにあるということが言えるのは、これはパウロがパリサイ的であつたときにはこの角度ではない。本当に心のうちにあつたらば、これは本当に福音的な角度になる。心の中にあつた、神の法則が。天の法則が、天則が心の中に刻まれる。それは心のうちに本当に刻まれているときに、はじめて歓びというものがくる。

「^{おきて}律法に対して私はどうしてもよろこべない」

といって、パウロがローマ書7章でもって苦しんでいる。

「あわれ悩める人なるかな。この死の体^{からだ}より我を救はんものは誰ぞや」

「どうしても律法を本当によろこんで、これに従うことができない。別な法があつて自分をとりこにする」

と言っている。それを詩篇の作者は、

「⁸わが神よわれは聖意にしたがうことを楽しむ。なんじの法はわが心のうちにある」と

この現実をとにかくも告白することのできたときには、本当にこの作者は幸いである。このすがたが即ち義なんです。いいですか。

「⁹われ大いなる会^{つどい}にて義をつけしめせり」

という、この義というのはこの8節が即ち義である。義の内容なんです。その反対が不義です。それではつきりわかる。「汝の聖意をよろこぶ」ことのできない在り方が不義なんです。「汝の法がわが心の中に本当に在る」ということでない在り方が不義なんです。即ち、神さまとの関係がまっすぐにそのように立つて、それが本当に融けて――ただ立っているばかりでなくて――本当にそれが融けて、歓びの交流となるような世界です。

いつか言いました。



「汝殺すなかれ」

は、

「汝殺すなし」

ということであつたと。

「汝は殺人なんかしない。私がおまえの神であるから」

これは神さまの、イスラエルの民に対するところの信愛の宣言である。それに対して、

「本当に神さま、そうです」

といって、神さまに同じく信愛して、

「私はうれしいです。あなたにそんなに信愛していただいて、逆に力がきました」

というのが、これが飲む世界です。これを命令として受けとると、

「いや、そいつはどうも〔従えないな〕」

といって反発するんです、人間というものは。律法が命令となっているから。

「律法は逆に罪を刺激する」

とパウロが言ったとおり。ところが、私たちは現実にはどちらかというと、それができないものですから、神さまとの本当に義しい関係とその融け合いができないものだから、そこに不義がある。しかもその不義は、こつちからはどうにもならないので、神さまが赦してくださる。

●根源現実

イザヤ書の中にちよつと面白い言葉がある。イザヤ書33章24節、

「²⁴かしこに住めるものの中われ病^{やめ}りという者なし。彼^{かしこ}処^{とが}における民の咎はゆる

されん」

「病める者がなく」と。それからその「民の咎はゆるされてしまう」と。これは今のところと相照応するような場所です。

それで、皆さん、私たちはこのキリストの十字架の贖いによつてすっかり私たちは背負われたわけでしょ、不義が贖いとられたわけでしょ。すべての不義がゆるされて、一つも例外なしにゆるされた。それをゆるされているのに、

「ゆるされていない!」

といって、抗弁するならば神さまは、

「それは仕方がないな」

と仰る。私たちは物ではないんだから。

「そうかい、それは仕方がないな、本当にゆるされているのに。それを受けとるまで待っているよ」

と。ああ。受けとるということだけはしなければならぬわけです。私たちは物ではない。



物理的法則じゃないんだから。神さまの法則は自由意志の法則ですから。

「いやです!」

といえば、

「そうかい」

と、神さまは待つていらつしやる。しかし、待つていることは、憐れみをもつて待つていらつしやるんですが、また同時に審判がやはり加わつてきます。審判と憐れみは並行している。それが最後の審判まで遷延^{せんえん}（のびのびになる）したら大変なことになる。最後の審判まで遷延していたら、もうこれはちよつと困る。ところが、この赦されてあるということ

をただ、

「はいっ!」

といつて全身で受けとるということだけ。また、すべて病は癒されてあるということ、根源的に。罪が赦されていることは魂の世界、病が癒されていることは肉体の世界。霊肉渾然^{こんぜん}としてこれは完全に贖いとられていてるから、

「すべての不義をゆるし、すべての病をいやす」

という。現実には私たちには罪があるうが、現実には私たちは病めるものであろうが、信仰の根源においては私たちはキリストのゆえに、主のゆえに罪はなく病はなし。皆さんと私たち一人びとり全部、例外なしにそうです。これをはつきり受けとつてください、これをはつきりと。

皆さんはこの夏の集会は、もし言うならば、この一つを本当に受けとりに来たといつてもいいくらいなんです。ああ。

「すべての不義をゆるし、すべての病を癒す」

と、癒されてある。これを祈りの世界で本当に受けとつてごらん下さい。そこには何かしらんけれども、驚くべき力が、歓びが、生命がわいてくる。キリストの贖いの力が、キリストの生命が。私たちのどんな病にも。いや実に、死人をも甦らせたキリストではないですか。その盲人の目を開き、その聾者の耳をひらき、その跛者を立たしめ、その癩病人を潔め、その死人を甦らせた。

「私に躓かざる者は幸である。私の救いはこの徴において顕しているごとく、天的な、いかなる例外をもゆるさないとこの救いである。神さまの全能は、全愛はそのようにかかつて来ているのである」

ということ、全身をもつて受けとるということ。「それでも」とは言わせない。

「それでも私は「ダメです、受けとれません」

とは言わせない。

「現実はどうであつても、神さま、私の根源は、私は目があいています。私は耳が聞こえています。私は足が立っています。私は手が動きます」



というんです。これはこのイザヤ書35章においても、また28章か何かにおいても預言している。イザヤ書35章にもあつたでしょ。それからイザヤ書42章にもある。

「⁵天をつくりてこれをのべ、地とそのうえの^{なりいでもの}産物とをひらき、そのうえの民に息を与え、その中をあゆむものに^{みたま}霊をあたえたもう神エホバかく言給う。
⁶云くわれエホバ公義をもて^{ただしき}なんじを召したり。われなんじの手をとり汝をまもり、なんじを民の契約とし^{ことくにびと}異邦人のひかりとなし、⁷而して^{めしい}瞽の目を開き^{とらわれびと}俘囚を獄よりいだし、暗きにすめるものを^{おり}檻のうちより出さしめん。
⁸われはエホバなり是わが名なり。我はわが栄光をほかの者にあたえず、わがほまれを偶像にあたえざるなり。」(イザヤ42・5〜8)

このエホバの神はキリストにおいてはつきりと示現し給うた。そしてナザレのイエス。キリストは神の全能全愛を徹底的にそこに身証なし給うた。

それなのに、そのときの人たちは目が明かせられても御利益的に躓いてみたり、耳が聞こえさせられても御利益的に躓いてみたり。片一方では、それを今度は妬みの目をもって批判してみたり。みんなキリストに躓きました。

どうか、私たちはこの「キリストの福音」というならば、水を割らざるところの聖書の驚くべき恩寵の世界に、魂のまた肉体の根源現実として受けとってください。魂のまた肉体の根源現実として。

●キリストの原始核

キリストの原始核は皆さんの中に入っている。なんとすばらしい、私たちの中にキリストの原始核、生命が来ているか。原子力時代というならば、私たちはキリストの、本当にこの原始の――始めですよ、この原始は――このキリストの原始力、原始核が皆さんの中に来ている。

私みたいなこんな貧弱な体格の男が、なぜとにかく力が与えられるか。仕方がないですよ。皆さん一人ひとりこれが受けとってきたら、

「何かしらんけれども、自分が今までもよりも違ってきました」

ということを告白できなくては。福音は空手形ではないから。

「^{ことば}神の国は言にあらず、^{ちから}能力にあればなり」

とパウロが言ったではないですか。

祈れますよ、皆さん。祈っていて、祈りながら、必ず勝利しなければダメですよ。どんなに行き詰まりました、祈りの中で勝利しなくては。現実はどうなんかに悲惨であつても、どんなに破れていても、どんなに苦しくあつても、もうひとつ奥の現実で勝利しなくては。いかに。キリストは、

「われ既に世に勝てり」



と言われた。罪に勝ち、病に勝ち、不義に勝ち、死に勝ち、陰府よみに勝ち、サタンに勝ったキリストではないですか。そのキリストを受けて、私たちに勝利はないことはないんです。ああ。この勝利は人をぶつ倒す勝利ではない。人を同じく――自分がそのようにしてキリストがわがうちに勝利し給うたのだから――

「その勝利を皆さんに、他の人に分けてあげましょう」

というのが、この勝利なんです。私する勝利ではない。キリストの勝利を上げる、分け与えて、そして互いに飲む勝利なんです。

だから、詩篇の作者がうれしくてたまらないから、

4 なんじの生命をほろびより贖いつくしみいだし仁慈と憐憫とを汝にかうぶらせ、

5 なんじの口を嘉物よきものにてあかしめたもう。斯てなんじは壮わかやぎて驚のごとく新あらたになるなり。

という。イザヤ書の40章の終わりの方もそうだったでしょ。ここらの詩篇とはもうみんなイザヤ書と気脈が、気合が通じている。27節から、

「27 ヤコブよなんじ何故にわが途はエホバにかくれたりというや。イスラエルよ汝なゆえにわが訟うったえはわが神の前をすぎされりとかたるや。

そんなことはないよと。

28 汝しらざるか聞かざるかエホバはとこしえの神、地のはての創造者にして倦うみたもうことなく、また疲れたもうことなく、その聰明さとこと測りがたし。

29 疲れたるものには力をあたえ勢力いきおいなきものには強きをまし加えたもう。30 年少わかきものもつかれてうみ壯さかんなるものも衰えおとろう。31 然しかはあれどエホバを俟望まちのぞむものは

エホバに依り頼むものは、

新あらたなる力をえん。また驚のごとく翼をはりてのぼらん。走れどもつかれず歩

めども倦うまざるべし。」(イザヤ40・27〜31)

常識的には考えられないような弱い方々がここまでのぼって来たではないですか。皆さん、この驚のごとく、エホバの力をもって、キリストの力をもってやって来られた。

この詩篇103篇の1節から5節まで読んでもう既に、

「わが杯さかずきはあふるるなり」

と、われという杯はこの神の力をもってあふるるなりと。

理屈をこねまわしているうちは、福音は入らない。これは本当に全身をもって受けとる世界でありまして、アタマでわかる世界ではない。受けとる世界である。このことのためには私たちは何と言われても――私は皆さんから棄てられても仕方がない――行きますよ。パウロすらもとうとう、

「あのナザレのイエスの異端のかしらだ」



なんて散々悪口いわれた。それがしかしながら、全世界に広まっていくんです。私たちはむしろ本ものを叫びはじめたらば、いろんなことを言われたって、却ってそれによって本当に力強けられる。私は敵とは思っていない。敵とは思っていないけれども、私を敵みにしている。けれども、私は突き抜けているから、突き抜けさせられているから、いくらどう攻撃したって、

「私には主義も主張も立場も何もない」

と言っているでしょ。ですから、どうにもなりません。私は自分の小さな主義主張、信仰なんてことを言っているのではないのだから。私はこの中に入る。この中へ入って、聖書によって叫ばしめられている、証言せしめられているだけの人はなしです。

皆さんは私と一緒に今、証言の中に入ってきたでしょ。皆さんは、私と一緒にこの生命の中に入ってきたでしょ。それでなかったら、集会はやめた方がいいです。

6 エホバはすべて虐げらるる者のために公義と審判をおこないたもう。

大丈夫。どんなに虐げられても、迫害を受けても、誤解されても、大丈夫。神さまの目はまちがいが無い。神さまの審判は公平である。

どうか、そういった終末的な角度から、そういった永遠的な角度から、人生をつかまえていこうじゃないですか。過去も現在も未来も、真にこの驚くべき永遠的な終末的現実においてグツとつかまえて、それが生きてくる。過去の恩寵が生きてくるし、未来の希望がここに発動してくる。信仰の世界とは真に生き生きとした現実。なんとすれば、過去はそこにいのちしてくるし、未来はそこに臨んでくる。永遠をもつ者、神さまをもつものは、

「昔あり、今あり、後きたり給う」

ところの主イエス・キリストを有つものは、真に歴史をつかんでいる者であり、また真に歴史を生きる者なんです。

●キリストの永遠の翼

この神さまの審判は虐げられたるもののために行われる。どんなに地上でマイナスを受けとって、どんなに人に認められなからうが、いいです。天上に、間違えのない記録がちゃんと出来ている。天界に。

「汝らの名の天にしるされたるをよろこべ」

とキリストは言われた。

7 おのれの途をモーセにしらしめ、おのれの作為をイスラエルの子輩にしらしめ給えり。

神さまは何で知らせたんですか。何か書き物で知らせたのか。そうではない。さつきから申し上げているとおり、歴史を通して知らせたんです。アブラハム、イサク、ヤコブから、ずっとモーセからこのイスラエルの歴史を通して知らしめた。神さまの記録は即ち歴史な



んです。たとえば、申命記の32章の、

「天よ耳を傾むけよ我語らん。地よ吾口の言を聴け。2 わが教えは雨の降るがごとし。吾言は露のおくがごとく小雨の若艸の上にふるごとく細雨の青艸の上にくだるが如し。

すばらしい言葉ですね。

3 我はエホバの御名を頌揚ん。我らの神に汝ら栄光を帰せよ。4 エホバは磐にましましてその御行爲は完くその道はみな正し。また真実ある神にましまして悪きところ無し只正しくして直くいます。」(申命記32・1〜4)

〔編者註… これ以降は、現在残っている録音(ダビングされたもの)が途中で脱落しているため、「曠野の愛」誌28号(1957年夏季号)の同講筵の録音筆記により補充する〕

如何に、イスラエル民族、そのモーセが、その生活でもって、エホバの神にぶつかっているかがわかる。そして、モーセをしてこの磐から生命の水をほとばしりさせた。

「この磐は即ちキリストである」

なんてパウロが言っただじやないですか。

「その御行爲は完くしてその道はみな正しました真実ある神にましまして」

真実の神であつた。即ち「アーメン」の神であつて、こんな神様にむかつて誠に申し訳ない次第であります。

「6 愚にして智慧なき民よ 汝らがエホバに報ゆることは是のごとくなるか

エホバは汝の父にして 汝を贖い また汝を造り 汝を建てたまわずや。

どうです、「父だ」「贖い」「造り」「建てた」と。同じような言がイザヤ書にもある。ずうつときまして、9節、

9 エホバの分はその民にして ヤコブはその産業たり。

イスラエルというものは神様の「もちもの」だというんです、イスラエルもヤコブも。

10 エホバはこれを荒野の地に見 これに獣の吼ゆる曠野に遇い〔出会して〕

環りかこみて之をいたわり 眼の珠のごとくにこれを護りたまえり。

11 鷗のその巢雛を喚起こし その子の上に翱翔るが如く エホバその翼を展

べて彼らを載せ その翼をもつてこれを負いたまえり。

12 エホバは只独りにてかれを導き給えり 別し神はこれとともにならざりき。」

(申命記32・6〜12)

このエホバの神がイスラエルの民をその翼に乗つけて導いた。さつき私は言いました、「皆さん、みたまの翼になりなさい」

と。この神様の翼に、キリストの永遠の翼になって、そうして私たちはこの歴史を、この人生を、この世界を、この宇宙を突走って行くことができる。

8 エホバはあわれみと恩恵にみちて怒りたもうことおそく仁慈ゆたかにまし



ませり。

⁹恒にせむることをせず永遠にいかりを懷きたまわざるなり。

¹⁰エホバはわれらの罪の量にしたがいて我等をあしらいたまわず。われらの不義のかさにしたがいて報いたまわざりき。

なんと、ねんごろな、あたたかい心でしょう。私たちは本当に慰められる聖言です。

¹¹エホバをおそるるものにエホバの賜うそのあわれみは大いにして、天地よりも高きがごとし。

¹²そのわれらより愆をとおぎけたもうことは東の西より遠きがごとし。

どうしてこういう言が出てくるんでしょうね。いわゆる文学じゃないですよ、これは。形容してるんじゃない。私は旧約のこういつた言を読んで、彼らは本当になんて素晴らしい現実生きていたか、彼らの靈魂がなんと若々しい、躍動している靈魂であるかということに驚く。これは実感をそのまま言っているんです。

「そのわれらより愆を遠ざけ給うことは、東の西より遠きがごとし」

という。

●天則

¹³エホバの己をおそるる者をあわれみたまうことは父がその子をあわれむが如し。

「父」という言がときどき旧約にも出てくる。本当にこの「父」をつかまえたのが、イエス・キリストです。さきほども2か所ばかり出て来ました。私は殆んどお父さんを知らん。5才の時、亡くなりましたから。けれども、私は小供の父になって、少しは父というものがわかりましたがね。まあ仕方がない。

「父がその子を憐れむが知し」

という。

¹⁴エホバは我等のつくられし状をしり、われらの塵なることを念い給えばなり。

塵から造った。アダムは土から造られた。「アーダム」というのは（異論もありますが、「アーダーマー」という「土泥」という語からできた言葉です。その語尾を省いて「人間」になりました。そうして、それに氣息を吹きかけた。

「そんなのは神話でしょ」

と今の若い人はすぐ言うでしょう。神話ですよ、神話だけれども、その神話が表現しているところの真理が読めないかというんです。地的な要素に天的な要素がその内側に入って、地的なものに天的なものがその内側から発動せしめて、そうして本当にこの天的なもの、キリストの生命、天の生命にふれる。その靈魂が本当にキリストの生命に触れたならば、



この地的な肉体が脱落してゆくあとに天的な、

「血氣の体あり、靈の体あり」

とパウロが言った霊体が生じ、本当の贖罪あがないが成るのです。だから皆さん、病んでも勝ちます。霊体が始まっているから。そいつが必ず肉体を征服して行きます。神様の御用は神様の聖意に従って、聖意のあるところに必ずその人の存在を通して展開していきます。

「なんじの聖意を我よろこぶ」

とは、そのような贖われたる自分というものを見たときに、本当に「汝の聖意をよろこぶ」ということが告白できます。

15 人のよわいは草のごとく、その栄は野の花のごとし。

16 風すぐれば失せてあとなくその生おいいでし処にとえど尚しらざるなり。

日本の何か、文学でも読んでいるような言葉です。諸行無常！ 卒直に言っている。もし、ただ土のかげらのような、そういった相対的な存在であつたならば、噫！

「夏草やつわものどもが夢の跡」

というわけです。けれども、どんなに夢の跡でも、また問えどもその人はいなくても。

今日あたり、あの前島君が共にいるといいなあと惜しまれてなりません。彼は我らとここに一緒に来たことがあつたですね。

「ああ、前島君、君は今、居ないのか！」

と思うですよ。けれども、前島君は、今ここに私たちの肉眼に見えなくても、彼は一緒にこの集会を喜んでいる。そうして、私たちのこの根源現実において一つになって、「ああそうだ、そうだ」と言つて、彼は私たちと讃美を共にしているに相違ない。その現実、本当に私は無理に信じているんでもなんでもない。本当にそうなんです。

だから、問えども草は答えなくても、私たちにはこの霊の現実においては幽明、相こたい応えている。はかなさの奥に、はかなくないものを見ていかなければダメですよ。

一年毎に花は咲いてしばむ。花は咲いてしばむけれども、その咲いている姿において、そのはかなき姿において、永遠の姿を觀みたのがキリストなんです。

「その服裝よそおい、ソロモンの栄華もこれに及およばず」

というのは、神様の栄光を、散りゆくところの花に、神の栄光を見たのです。

今日も来るときに、軽井沢の東の空にすうーっと虹が立った。

「ああ、きつと今頃、虹が出ているよ」

と私が言ったら、正直、虹が出ていた。そうして、しばらくにして消えるところのその虹に、永遠の契約しるしの徴があらわれました、ノアの大洪水のあとで。

それで、もう有為ういてんぺん転変も諸行無常も、みんな私たちはこの、

「すべての不義がゆるされ、すべての病が癒いされている」

ところの、本当の深層現実を掴つかまえて、表面現実をつき破つて喜びの世界を創造していく



ような靈魂になる。その人が在るところには、何かしらんが、常に天国が現じているような人になる。私たちは祈りの世界で主のみ力にあずかり、

「どっこい「大丈夫、勝利する」」

と言つて戦つてゆくんです。時間の中にあつて時間を超え、空間の中にあつて空間を乗り越えるような現実の中に、私たちの永遠の生命がある。一切の仮象的なものの中に永遠の生命を掴まえていく、それを体現していくというのがこの聖書の本当の信仰の現実、恩寵の現実です。

そうしたら、もう皆さん、なんか知らんけれども、どうでもよくなつちやつたでしょ。

「ああ、どうにでもなる、大丈夫だ!」

というのが、なにか知らんけれども湧いてきたでしょ。そうです、それ以下のもので神様はない! それ以下のものでキリストはない!パウロの「秘訣」の境地が親しくなつて来ました。

17 然はあれどエホバの憐憫はとこしえより永遠まで、エホバをおそるるもの
にいたり、

そうじゃないですか、そんなにはかない世界だけでも、実存の神の憐憫は永遠まで、実存の主をおそるるものにいたり、

その公義は子孫のまた子孫にいたらん。

子々孫々にまで行く、天の法則が、天則が。物理的法則は一糸乱れず動いている。このコップは傾ければ水はこぼれる。これは物理的法則。「私はこぼれたくない」など言つたつて、物理的法則は仕方がない。ちゃんと水はこぼれる。そのように、神様の聖意の発動するところは、これはどの物理的法則よりも素晴らしいところの天則が働いている。その驚くべき天の法則が真の自由である。これを喜ぶと言つた。それが即ち義の世界である!

いつも申すように、義とはみ旨を全的に受けとる事態です。神様の法則は働いている。どんなに勝手なことをしていても、それは「天網恢々、疎にして洩らさず」というんです。この天の法則に乗つかればこんな楽なことはない。

18 その契約をまもりその訓諭を心にとめて行うものぞその人なる。
ときた、最後のところに。いいですか。

19 エホバはその寶座をもろもろの天にかたく置えたまへり。その政權はよろ
ずのもののうえにあり。

なんと壮大な詩篇でしょうね。ものすごい大きな文字ですよ。

●聖言を行う勇士

20 エホバにつかうる使者よ、

使者よ、マラキよ、



エホバの聖言のこえをきき、その聖言をおこなう勇士よエホバをほめまつれ。

その聖言、み意を行う勇士よ。何が勇者かといって、神様の聖意を行う人は最大の勇者なんです。ヒットラーも、ナポレオンも神様のみに反したから、英雄の末路はあのようなところ。ところが、どんなに弱くても、どんなにカマボコのように病床についていても、その人の存在が即ち、神の法則に乗っかっているときに、その人は本当の勇者で、日本を背負っていく。「一切の価値の転倒」とニーチェは言ったけれども、本当に価値が転倒してくる。神の聖意に貫かれて！ ということが本当なんです。この神の聖意を行う者が真の勇者である。けたちがいの大勇者は誰だろう、あの十字架についた羔の君、イエスです。真の愛をもつ者のみが真の勇者なのです。

「今までのキリスト教は信仰と言のキリスト教であつたが、もつと心と行為のキリスト教にならなければならない」

とゲーテが言ったが、この言は現代キリスト教への深い警告をふくんでいます。それは、当時の教会がやっぱり無力だったからゲーテが嘆いた。信仰と行為がズレを来たさないように二段がまえに合わせようとしたって、そんなことをしたってダメなんです。そんなことをしたって生命は来やしない。それは、

「信仰というのが即ち行為である」

というところに実存的に来なければダメです。

「信仰こそは最もはげしき行為である」

と私は叫ぶのです。

「本当の信仰が最も烈しい行為である」

と。神様に全身をもって

「はいっ！」

と言うことは、「全身を投ずる」ということは最も烈しい行為です。この行為ができなければ、実は聖書の世界に入れない。いつまでたってもズレを来たしている。だから、私は信即行、というんです。いわゆる現象的な行為はそれから出てくるでしょう。いわゆる現象的な行為を、今、問題にしているんじゃない。信即行とは根源現実の事態で、そうでなければ生命はありません！ エホバはアブラハムに、

「お前はイサクを献げよ」

と言われた。アブラハムは黙って準備にかかった。これが即ち信仰なんです。パウロは、

「アブラハムは信仰によって義とされた」

と言った。ヤコブは、

「アブラハムはその行為によって義とされた」

と言った。同じことです。ヤコブ書は決してルッターが言うような「藁の手紙」ではない。ヤコブとパウロの奥を洞察すると全く一つのことなんです。その信仰即行を、なんで神学



者は本当に掴んでくれないか。私みたいなこんな素人が叫ばざるを得なくなった。従来のキリスト教界がこの信即行に気がつかないので、プロテスタントは「信仰、信仰」と知らぬ間に観念的になっていくようです。またカトリックは相変らず「信仰プラス行為」というわけでしょう。しかしここに第三の路がありました！「信即行」、これが実は使徒の道でした。即ち、信が即ち最も烈しい行である。だから、

「はじめに行為あり」

なんて、ゲートルがヨハネ伝一章一節の、

「はじめ太初に言あり」

を大胆にも、そう訳した。そのゲートルの気持は、私はわかるんです。しかしゲートルは「信」をもっと突っこんでつかんでくれるとよかったです。大ゲートルといえども、この聖書の福音の光に照らせば、とけてくる。ゲートルでもキリストの福音の光の前には光がうすれます。彼自身、そのことを充分自覚していました。

「私は、『お前はキリストの前に頭を下げるか？』と訊きかれたら、私は無条件に頭を下げる」

と彼は告白しています。キリストの前には、大ゲートルといえども無条件に頭を下げざるを得ない。なんとなれば、イエスは神の栄光の顕現者であるからです。キリストから来るところの光に照らして見たら、一切の文化の正体が見えて来ますよ。そうしたらば、皆さん、学者や評論家や権力者などの語ることも、よくその真理性と限界を見わけ得て来ます。

²¹その万軍よ、その聖旨みことばをおこなう僕等よ、エホバをほめまつれ。

「聖言を行う勇者よ」「聖旨みことばを行う僕らよ」というこの言において、この詩篇は極まるのであります。キリストは、

「福音を聴いて行わざる者は天国に入れない」

と言われた。私たちは、

「真に聖旨みことばを行うということが即ち本当の意味の信仰である」

というところまでいかなければダメです。

「それは困ったな」

なんて、困らないです。私が行おうと思つたら困るんです。けれども、聖旨を本当に受けとるならば、受けとることが即ち根源的行為なんですから。いいですか。それが根源的行為、それが根源的信なんです。その焦点かつ原動力はキリストの十字架です！私を完全に贖つてくださり、かつ贖いつつあり給う十字架を受けとることは、私の最も根本的な行為なんです。

「永遠の生命を受けるにはどうしたらいいですか？」

と、キリストにきいたらば、

「神の子を信する、之なり」



とキリストは言われた。「信ずる、これなり」とは、この全キリストというものを受けとることなんです。「キリストを受けとる」ことは、人間の最も根源的な行為で、これほど素晴らしい行為はない。この行為を本当にした人が、それはその人にぐんぐん生命が展開する。だから行為中の行為は、即ち信であるということです。

聖旨をつねに発動し給うキリストを受けとれば、「その聖旨を行う」ということと一本に貫いて来ます。それが「勇者」また「僕」です。根源的な行為即信、信即行というもののから、技葉の行為が出てくる。キリストが事実をもって最も驚くべき行為をなしてくださったから、彼が私たちに「与える」という行為をなさつてくださったから、「与える」というこの行為に対して、「受けとる」ことが即ち信である。するとそこにまた、隣入におのれを「与える」という行為が展開してゆく。

これを皆さん、本当に受けとったならば、皆さんが本当に聖旨を行うところの勇士ますらおとなる。そして、クリスチャン中のクリスチャンであるんです！日本は、世界は今こそ神の真理の行為者を必要としている。我ら一人一人が本当に、

「我なんじの上に教会を立つ」

とキリストに言われつつ進まねばダメです。ペテロばかりじゃない。我々一人一人の上に教会が立つ。エクレシヤが立つ、幕屋が立つんです。これは、おのれの意志が「無」とされている無の教会です。一人一人が即ち、このペテロ的な隅すみの首石おやしとなる。それが即ち、

「聖旨を行う勇士ますらおよ」

というんです。これをもし、旧約で読もうというならば、イザヤ書のいわゆる「エホバの僕」の歌の「一か所をよみます。イザヤ書50章5節、

「⁵主エホバ、わが耳をひらき給えり われは逆らうことをせず 退くことをせざりき。⁶ われをむち打つものにわが背をまかせ わが髭ひげを抜くものにわが頬ほおをまかせ 恥と唾とをさくるために 面かおをおおうことをせざりき。⁷ 主エホバわれを助けたまわん この故にわれ恥ずることなかるべし。我わが面を石の如くして恥しめらるることなきを知る。⁸ われを義とするもの近きにあり。たれか私と争わんやわれら相共にたつべし わが仇はたれぞや 近づききたれ。⁹ 主エホバわれを助け給わん。誰かわれを罪せんや。視よ、かれらはみな衣のごとくふるび 蠹しみのために食いつくされん。」(イザヤ50・5-9)

それが即ち、聖旨を行うところの勇士であり、聖旨を行うところのエホバの僕である。すっかり全存在を、神の聖旨の中に投げ給いし主イエスの中に我ら投身せん。かくて起句と同様に終句は叫ぶ、

「わがたましいよ、実存の神を讃めまつれ！」
と。ハレルヤ！

